

## 道路整備に伴う環境影響予測について

「環境基本法第16条第1項」の規定に基づき、人の健康を保護し、生活環境を保全するうえで維持することが望ましい基準値として、騒音、大気汚染については環境基準が定められている。

## 騷音

戸建住宅を含む住宅及び各種施設を対象に騒音予測を行った。  
その結果、昼間、夜間ともに環境基準値を下回っていた。

区域区分		時間区分	
		昼間 (6～12時)	夜間 (12時～6時)
A地域	第1種居住地区(住宅地)	60 減点下	45 減点下
	第1種中高層住宅利用地区 第2種中高層住宅利用地区 第3種中高層住宅利用地区	60 減点下	45 減点下
B地域	第1種居住地区、第2種居住地区、準居住地区 用途指定地区等のない区域	60 減点下	45 減点下
	工業地区、商業地区、商業地区、準工業地区、工業地区	60 減点下	50 減点下

ただし、右表に掲げる区域以外の区域(以下「指定区域」も同様)は、(1)及び(2)については、上述に示す表の区域の趣旨に準じておとりとする。

＜道路に関する事項＞

区域の区分		時間の区分	
		昼間 (6～12時)	夜間 (12時～6時)
1	1地区のうち24地区のうち6地区を有する道路に面する区域 <sup>1)</sup>	60 減点下	45 減点下
2	1地区のうち24地区のうち1地区の区域を有する道路に面する区域 <sup>2)</sup>	60 減点下	45 減点下

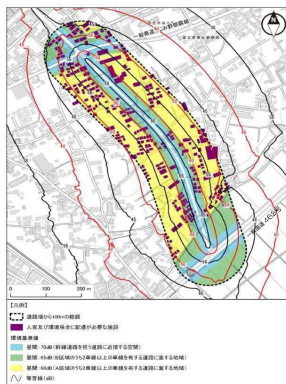
1) 都市計画決定の趣旨に適合する区域については、上述のとおりとする。特例として都市計画決定の趣旨に適合する区域と見做す区域がある。

2) 都市計画決定の趣旨に適合する区域については、上述のとおりとする。

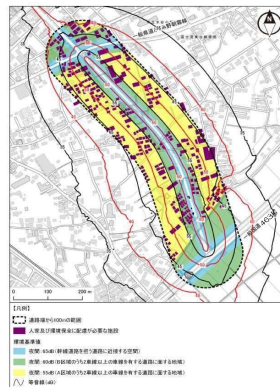
＜環境保全に関する事項＞

区分		時間の区分	
		昼間 (6～12時)	夜間 (12時～6時)
第1種	20 減点下	60 減点下	45 減点下
第2種	20 減点下	60 減点下	45 減点下

※ 要する労力<sup>3)</sup>



騒音レベル予測結果（予測高さ：4.2m、昼間）



騒音レベル予測結果（予測高さ4.2m、夜間）

# 大氣污染

道路縦断勾配の補正を含めて予測を行った。

その結果、勾配が特に急となる箇所が二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の最も高い地点となったがいずれも環境保全目標を下回った。

大気汚染に係る環境基準		
物質	環境上の条件 (設定年日等)	測定方法
浮遊状粒子物(SPM)	1時間値の1日平均が $0.10\text{mg}/\text{m}^3$ 以下であらう。かつ、1時間値が $0.20\text{mg}/\text{m}^3$ 以下のものを(俗称、6ヶ条)とする。	連続抽集による重量濃度測定方法又は日本において採用された同等精度と認められ、関係する質量の算出に用いる換算法、注1及び注2を若しくはすべて省略した方法
二酸化窒素( $\text{NO}_x$ )	1時間値の1日平均が $0.40\mu\text{g}/\text{m}^3$ から $0.60\mu\text{g}/\text{m}^3$ までの範囲内であつて、1時間値のうち最大のものがこの範囲内であること。(SS13, 7.11 係数)	フルサン法試験を用いる吸光光度法又は注1と異なる化学分析法
備考	<p>1. 環境基準は、工業用地利用等の他の一般大気汚染基準並びに「大気汚染に係る環境基準」に関する法律第19条に基づいて、適用しない。            2. 浮遊状粒子物とは、大気中に浮遊する微小な粒子物であり、その粒径が<math>10\mu\text{m}</math>以下のものである。            3. 二酸化窒素については、1時間値の1日平均が<math>0.40\mu\text{g}/\text{m}^3</math>から<math>0.60\mu\text{g}/\text{m}^3</math>までの範囲内にある環境においては、同じところのゾーン内における現在観測される水準を維持し、又はこれを大きく上回ることとなるようなものとする。</p>	

資料) 昭和 48 年 5 月 8 日環境庁告示第 25 号、昭和 53 年 7 月 11 日環境庁告示第 38 号

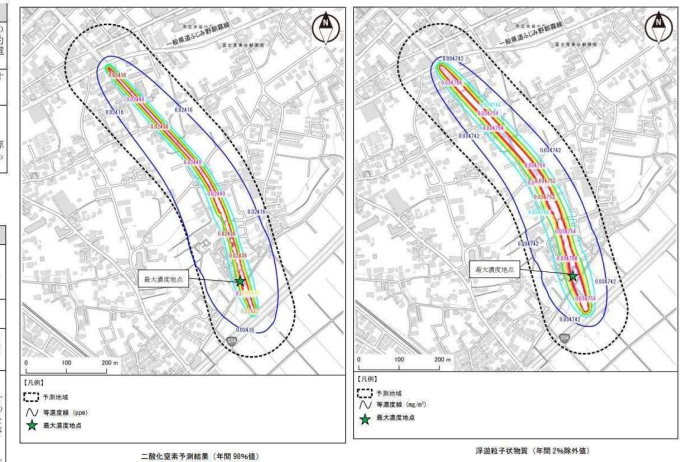
大気汚染に係る環境基準の評価方法	
評価項目	評価方法
浮遊状粒子物質 (SPM)	年間における平均値について、測定値の高い方から2%の範囲内にあるものを除いた平均値（2%外除量）が、 $0.1\text{mg}/\text{m}^3$ を超え、かつ、年間値として平均値が $0.1\text{mg}/\text{m}^3$ を超える場合は自然に超過しないこと。
	1時間値の平均値が $0.15\text{mg}/\text{m}^3$ 以下であり、かつ、1時間値が $0.25\text{mg}/\text{m}^3$ 以下であること。
二酸化窒素 (NO <sub>2</sub> )	年間における平均値について、測定値の低い方から98%に相当するもの（年間98%値）が、 $0.04\text{ppm}$ から $0.06\text{ppm}$ までゾーン内又はそれ以下であること。

備考

年間における大気汚染物質の状況を的確に判断するために、年間における測定値を大気環境の観察上および評価上の方法として、二酸化炭素、一酸化炭素、浮遊状粒子物質について年間における平均値の低い方から2%を除外した値、二酸化窒素については、年間における平均値の低い方から98%に相当する値を測定基準と見做して判断する。なお、人の健康の被害を防止する観点から、浮遊状粒子物質については2%以上を除外した値を、二酸化窒素については、この2%外除量に代わって、その評価値を行うものとする。

環境基準は、年平均値と1時間値として定められているので、測定結果を毎日又は時間別に環境基準と比較して評価する方法は、不適切である。

資料) 昭和 48 年 6 月 12 日環大企第 143 号環境庁大気保全局長通知、昭和 53 年 7 月 17 日環大企第 262 号環境庁大気保全局長通知



二酸化窒素予測結果（年間98%値）

浮遊粒子状物質（年間2%除外値）